

令和 元年 6 月 13 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02297

研究課題名(和文) 出版の政治学 ハーディの受容研究

研究課題名(英文) Hardy in Japan: The Politics of Publication

研究代表者

上原 早苗 (Uehara, Sanae)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：00256025

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、国際ハーディ協会により立ち上げられたプロジェクト、「グローバル・ハーディ」に寄与することを目的としたハーディの受容研究である。具体的には、戦前に出版されたハーディの『ダーバヴィル家のテス』の翻訳テキストを取り上げ、テキストに刻印された政治性を明らかにしようとするものである。これまで等閑に付されてきた、内務省警保局・検閲官による検閲に焦点を当て、テキストを受容する際に翻訳者・出版者が採用した 出版の戦略 を明確にするのが、本研究の最終目標である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東京書籍商組合編『図書月報』を精査することで、これまで等閑に付されてきた明治後期の内務省による性表現の取り締まりの実態に光をあてることができた。具体的には、検閲官と出版社との間にある種の共犯関係が成立していたこと、検閲官の人員は恒常的に不足しており閲読の時間に余裕があったわけではなく、そこに検閲官と出版社の共犯関係が生まれる素地があったことを浮き彫りにすることができた。また、翻訳者・出版社が検閲官に従順な態度をとりつつも、実際は伏せ字の意味効果を利用しながら、境界線を巧妙に侵犯していくプロセスに迫ることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to contribute to Global Hardy project, a project which examines how Hardy's works reached audiences beyond Europe and the USA, including Japan. My research analyses early 20th-century Japanese translations of Hardy's 'Tess of the d'Urbervilles' and demonstrates the significant impact of censorship and the emergence of mass publication on the image of Hardy and his fiction among contemporary Japanese readers, translators and publishers.

研究分野：英語圏文学

キーワード：イギリス文学 受容研究 トランスレーション・スタディーズ 書誌学 出版制度研究 トマス・ハーディ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年のイギリス小説研究では、「グローバル・サーキュレーション」という概念がテキスト読解上の新たな視座を提供している。「グローバル・サーキュレーション」とは、ポスト構造主義以降、著しい展開を見せているトランスレーション・スタディーズの知見を活かしながら、起点テキスト(原典)が目標言語・文化に遭遇する際にテキストに刻印される政治性を明らかにしようとする試みである。2013年に国際ハーディ学会でも「グローバル・サーキュレーション」を念頭に、本研究課題の責任者(上原)を含むおよそ10カ国の研究者からなる「グローバル・ハーディ」プロジェクトが立ち上げられた。上原が担当するのは、「日本の出版・検閲制度から読むハーディの小説テキスト」であり、本研究課題はこの「グローバル・ハーディ」プロジェクトと連動するものである。

伝統的に日本では、ハーディの受容研究は書誌学的見地から進められ、翻訳テキストの分析に踏み込まない傾向がある。本研究は、起点テキストが目標言語・文化に遭遇する時にテキストに何が起こるかを問題とするため、先行研究と交わるところがほとんどないが、しかし、先行する書誌学的研究(山本文之助『日本におけるトマス・ハーディ書誌』、篠崎書林、1957年; 那須雅悟『日本とハーディ』、『ハーディ全貌』、音羽書房鶴見書店、2007年)は、明治・大正時代に翻訳されたハーディのテキストを確定する上で不可欠な文献である。

また本研究では主として、性表現の検閲の観点と大衆読者層の誕生の観点から翻訳テキストを分析するが、前者に関わる内務省の検閲については未だ包括的な研究が存在しない。浅岡邦雄他『「内務省委託本」関係資料集』(千代田区立千代田図書館、2011年)は、大正13年から昭和12年にかけて内務省に納本された検閲原本を精査し、検閲の実態に迫ろうとする初めての本格的な研究である。浅岡らは、大正12年以前の検閲に関しては論及していないが、それは「関東大震災により内務省が全焼したため」(検閲原本は全て灰塵に帰ってしまった)(浅岡他、p.5)ことに依るといふ。

確かに検閲原本が消失したのは事実ではあるが、しかし、検閲の実態解明の手掛りが残されていないわけではない。上原の調査によれば、これまで閉却視されてきた東京書籍商組合・会報『図書月報』(明治35年創刊)には、当時の検閲官の人員配置や閲読の仕組み、発禁処分理由の一部などが記されており、会報は検閲の実態に迫る上で極めて有効な資料となるとの感触を得ている。

本研究は共犯関係をも含む、検閲官と出版社との複雑な関係の内実を明らかにし、次いで、翻訳テキストに刻印された翻訳者・出版社の出版の戦略、あるいは出版の政治学を明確にしようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、国際ハーディ学会で立ち上げられたプロジェクト、「グローバル・ハーディ」に寄与することを目的としたハーディの受容研究である。具体的には、戦前に出版されたハーディの *Tess of the d'Urbervilles* (『ダーバヴィル家のテス』1891年)の翻訳テキストを取り上げ、テキストに刻印された政治性を明らかにしようとするものである。これまで等閑に付されてきた、内務省警保局・検閲官による検閲などに焦点を当て、テキストを受容する際に翻訳者・出版社が採用した出版の戦略を明確にするのが、本研究の最終目標である。

3. 研究の方法

本研究はその方法において、検閲の実態の解明、翻訳されたテキストの分析、翻訳者・出版社による出版の戦略の解明、というふうに三分される。

東京書籍商事務所編『図書月報』、内務省関係資料『出版警察概観』『出版警察報』『出版警察関係資料集成』、『単行本処分日誌』、『禁止単行本目録』を分析することで、検閲の実態に迫る。

高瀬訳「テス」(『帝国文学』掲載、明治39年)、『運命小説テス』(榊原文盛堂、明治45年)、平田訳『テス』(大正14年)、宮島訳『テス』(新潮社、昭和4年)、広津訳『テス』(改造社、昭和5年)を分析の俎上に載せながら、主として榊原文盛堂、新潮社、改造社の出版の政治学を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 内務省警保局の検閲の実態

明治期に刊行された東京書籍商組合機関誌『図書月報』および内務省関係資料『出版警察概観』『出版警察報』『出版警察関係資料集成』、『単行本処分日誌』、『禁止単行本目録』を精査したところ、内務省は検閲に関する情報を積極的に書籍商や新聞社に流しており、検閲官と出版社との間にはある種の共犯関係が成立していたこと、例えば『運命小説テス』(榊原文盛堂、明治45年)にはその共犯関係が窺える箇所が散見されること、検閲官の人員は恒常的に不足していたため閲読の時間に余裕があったわけではなく、そこに検閲官と出版社の共犯関係が生まれる素地があったこと、が明確になった。この発見は現在研究論文として纏めているところだが、その一部は「Hardy in Japan: Translators, Translation, and Publication」, *Literature Compass* 13.3 (2016): pp. 174-185 として公にしている。

(2) 出版の政治学

榎原文盛堂の戦略

版本形式の『テス』初訳は、榎原文盛堂から刊行されたが、同出版社に関する研究はこれまで全くなされてこなかった。榎原文盛堂は明治に呱呱の声をあげた出版社で、英語教科書の『ナショナルリーダー』や外国語辞書、習字教本、道徳読本など、若者の教育に裨益する書籍を数多く刊行した。創業者・榎原友吉(1856-1946)は明治23年に東京書籍出版業者組合(後に東京書籍商組合に改組・改称)の役員に選出されると、昭和21年に亡くなるまで長く東京書籍商組合の発展に寄与した人物である。明治の出版社の常として榎原文盛堂の出版目録は現存せず、明治45年に刊行された『テス 運命小説』(前編)が一体何部刷られたのか、判然としない。翻訳作業は困難を極めたのか、後編は(広告が出されたが)ついに出版されることはなかった。

未完とはいえ、伏せ字の使用された『テス 運命小説』(前編)は日本の出版文化史の観点から興味深い書籍である。明治26年に出版法が改正され、出版社は書籍刊行の3日前までに内務省警保局図書課に出版届とともに製本2部を提出する必要があった。そのうち、1部は正本として検閲業務に使用され、残る1部は帝国図書館(現在の国立国会図書館)に副本として収蔵された。製本済みの書籍が検閲の結果、頒布禁止処分になれば、出版社は損害を被ることになる。そのリスクを回避するために、出版社は検閲官の介入に先んじて口にしえないものを遮蔽する記号、すなわち伏せ字を使用した。

『テス 運命小説』を分析した結果、18カ所に伏せ字が使用されていることが判明した。その一例が第11章のチェイスの森の挿話で、「キ」「ス」あるいは「接」「吻」の二文字が伏せられている。あるいは、「しかしアレクサンダは無理に手を伸ばして以前のやうにテスをめた、今度は彼女も逆らわなかった」という一文では「抱」「き」「し」の三文字が伏せられている。明治の出版者は、何が伏せられているか、読者に分かるように伏せ字を用いたと言われているが、なるほど山田訳の翻訳も何が伏せられているかは明確に分かる。ちなみに、国会図書館デジタルアーカイブに公開されている『テス 運命小説』の当該箇所を見ると、ご丁寧に「抱」「き」「し」の三文字が読者の手で書き込まれている。となれば、伏せ字というものは伏せる身振りをしつつ、その実、伏せられるべき内容を読者に伝える記号ということになる。あるいは、出版社による自己検閲の痕跡を露わにし、口にしえないものと口にしうるものとの境界線を読者に伝える記号だと言える。

ヴィクトリア朝イギリスでは、グランディズムという名の検閲が作動し、出版社は規制を余儀なくされたが、活字テキストに検閲の痕跡を残すような「甘い」ことはしなかった。口にしえないものは跡形なく削除されるか、口にしうる言葉に置き換えられるか、そのいずれかである。彼の国の徹底した検閲に比べると、山田の翻訳に残された伏せ字には、たとえ形式的にせよ、伏せられるものが伏せられていれば不問とする/される、検閲官と出版者との阿吽の呼吸とも言うべきものが窺える。こうした両者の共犯関係に焦点を当てながら、研究成果を‘Hardy in Japan: Translators, Translation, and Publication’, *Literature Compass* 13.3 (2016): pp. 174-185 として公にした。

新潮社・改造社の戦略

昭和初期の『ダーバヴィル家のテス』の翻訳テキストの出版状況を調査したところ、この小説が日本で広く読者を獲得した一契機に、当時の円本ブームと大衆読者層の誕生があることが明らかになった。円本とは、毎月一冊一円で配本された全集のことを言い、関東大震災で打撃を受けた改造社による起死回生の策、『現代日本文学全集』(昭和元年配本開始)の刊行に端を発している。読者にとりそれまで高価だった文学書が一円で入手できたため、改造社の企画は大いに当たり、『現代日本文学全集』の契約件数は20万を超え、後続の全集が次々と刊行された。円本誕生以前、『テス』は主として一握りの教養ある読者に読まれたテキストだったが、円本ブームに乗って、新潮社『世界文学全集』や改造社『世界大衆文学全集』などに収録され、広く人口に膾炙されることとなった。

新潮社『世界文学全集』にせよ改造社『世界大衆文学全集』にせよ、伏せ字が利用されていないため、一見すると、翻訳者・出版者は表現の自由を享受しているように見える。しかし本研究によって、新潮社のテキストはテスのセクシュアリティを脱色するため、被害者としてのテスの物語を立ち上げており、その物語の流布に一役買ったのが、パラテキストの月報であることが明らかになった。また改造社『世界大衆文学全集』では、翻訳者の広津が自己検閲していると思われるところが少なからず発見された。テスの物語は「誘惑」か「凌辱」か、長きにわたる論争の歴史があるが、広津訳テキストでは、テスがアレクとの関係について言及する箇所はセクシュアルな表現が削除されていることが判明した。これは、改造社の全集が若年層を含む読者をターゲットにしていたため、テキストからエロスを脱色する必要があったのではないかと推測される。現在、こうした研究結果を論文として纏めているところだが、その一部は、「文盛堂と『テス 運命小説』」、『日本ハーディ協会ニュース』第78号(2015)および「テキストとパラテキスト 運命小説円本時代の『ダーバヴィル家のテス』」、『日本ハーディ協会ニュース』第81号(2018)などにて発表している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- (1) 上原早苗「テキストとパラテキスト 円本時代の『ダーバヴィル家のテス』」『日本ハーディ協会ニュース』第 81 号(2018) pp. 3-5. (招待)
- (2) Sanae Uehara, 'Hardy in Japan: Translators, Translation, and Publication', *Literature Compass* 13/3 (2016): pp. 174-185. DOI: 10.1111/lic3.12302 (査読有)
- (3) 上原早苗「文盛堂と『テス 運命小説』」『日本ハーディ協会ニュース』第 78 号(2015) pp. 3-4. (招待)

〔学会発表〕(計 4 件)

- (1) Sanae Uehara, 'Tess and Censorship', Global Hardy at Kent, University of Kent, 8 March 2019.
- (2) 上原早苗「誌上シンポジウム『Candour in English Fiction』を考える」日本ハーディ協会第 61 回大会シンポジウム、徳島大学、2018 年 10 月 20 日。(指名)
- (3) Sanae Uehara, 'What Does the Manuscript Tell Us?', 1st International Conference on Modern Manuscript Study, National Central University, Zhongli, Taiwan, 2 December 2016. (招待)
- (4) Sanae Uehara, 'History or Taxonomy', 1st International Conference on Modern Manuscript Study, National Sun-Yat Sen University, Kaohsiung, Taiwan, 4 December 2016. (招待)

〔図書〕(計 2 件)

- (1) Sanae Uehara, ed., *Silence* (Nagoya: ARM, 2017).
- (2) 上原早苗他訳、トマス・ハーディ『恋の霊/緑樹の陰で』(大阪教育図書、2016 年)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上原早苗 (UEHARA SANAE)
名古屋大学・人文学研究科・教授
研究者番号：00256025

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。